「かぬまふるさと大使」で鹿沼市出身のプロライダー・渡辺一馬選手が、国内最高峰のバイクレース「全日本ロードレース選手権」ＳＴ１０００クラスで３連覇を達成しました。おめでとうございます。
この資料は２０２３年の激闘をレポートする企画展のＷＥＢ版です。

■発行：鹿沼市■

【渡辺一馬選手展　-王者の肖像-】
（前期）鹿沼市役所本庁舎
2023 年 12 月 21 日（木）
～2024 年 1 月 11 日（木）
（後期）鹿沼市民情報センター
2024 年 1 月 13 日（土）
～2024 年 1 月 28 日（日）

渡辺一馬選手
プロフィール

1990 年 05 月 06 日生まれ。
自身もライダーである父親の影響から 5 歳の誕生日にポケバイを与えられ、初めてのレースは 6 歳。
9 歳からミニバイクレースを始めると各地で数々のチャンピオンを獲得し、14 歳になる 2004 年にロードレース GP125 にデビュー。初年度にして登竜門と言われる筑波ロードレース選手権シリーズのチャンピオンを獲得します。
2005 年には全日本ロードレース選手権へスポット参戦をし、翌 2006 年にはフル参戦を開始。
この年は WGP もてぎラウンドでのフル参戦チームである human gest RacingTeam からの代役参戦をきっかけに実力を認められ、WGP シーズン後半の 3 戦へ出場。
貴重なヨーロッパでの世界選手権デビューも果たします。

2009 年には当時全日本選手権きっての激戦区 ST600 へとステップアップすると並み居る強豪と互角に戦いルーキーオブザイヤーを獲得。
2011 年には HONDA 系トップチームの Kohara Racing へと移籍すると、着々と結果を残し 2013 年には念願の全日本チャンピオンを獲得します。

そこからは 2014 年に J-GP2 へ、そして 2015 年には全日本最高峰の JSB1000 へと着実にステップアップしていきます。
2016 年には F.C.C.TSR に移籍し世界耐久選手権シリーズという新たな挑戦をし、初参戦となったル・マン 24 時間レースで 3 位表彰台を獲得するなど、チーム内で唯一フル参戦し活躍しました。

2017 年には Kawasaki のトップチームである Kawasaki Team GREEN へと移籍。上位でレースを展開し、シリーズランキング 3 位を獲得。鈴鹿 8 時間耐久ロードレースでも 2 位表彰台に上ります。
2018 年には、Kawasaki にとって 2007 年以来となるスプリントレースでの優勝を達成。鈴鹿 8 時間耐久ロードレースでも 3 位表彰台を獲得しました。
2019 年も Kawasaki のエースとして活躍、ランキング６位となりました。

2020 年、師と仰ぐ伊藤真一監督の新チーム「Keihin Honda Dream SI Racing」に移籍。再び HONDA のマシンを駆り、JSB1000 クラスでランキング５位となりました。
2021 年にはチームの名称が「Astemo Honda Dream SI Racing」に変わり、ST1000 クラスにスイッチ。２回目となる全日本チャンピオンに輝きます。
2022 年も ST1000 クラスに参戦。ディフェンディングチャンピオンとしてゼッケン１を背負い、６戦中４勝を挙げ連覇を成し遂げました。
2023 年も ST1000 クラスに参戦し、激戦のさなか優勝１回・表彰台３回を獲得してチャンピオンを守り、３連覇を成し遂げました。

（渡辺一馬選手ホームページから引用・一部加筆修正）

【関連サイト・SNS】

■渡辺一馬選手　公式ホームページ
Kazuma Watanabe Official Website
http://www.riderkazuma.com/

■渡辺一馬選手　Facebook
https://www.facebook.com/kazuma.watanabe.73

■渡辺一馬選手　Instagram
https://www.instagram.com/kazuma_watanabe_/

■渡辺一馬選手　X（旧 Twitter）
https://twitter.com/Kazuma_W_37
@Kazuma_W_37

■Astemo Honda Dream SI Racing
公式ホームページ
https://si-racing.com/

レース以外での活動

2022 年 11 月 6 日、最終戦の激戦を制し全日本ロードレース選手権 ST1000 クラスの連覇を達成した渡辺一馬選手。ここから 3 連覇への戦いが始まりました。
しかし、プロライダーの活動はレースで走るだけではありません。このコーナーでは自身のレース以外での活動を紹介します。

イベント「CELEBRATE THE CHAMPION」にて
2023 年 3 月 2 日（HYOD PLUS HAMAMATSU）
渡辺選手の身を守るスーツとグローブは、トップブランドのひとつ「HYOD PRODUCTS」の製品。HYOD では渡辺選手の連覇を記念してウェアを販売し、拠点ショップでのイベントには各地からファンが集まった。
スーツにある様々なロゴは、ライダーとチームを支援するスポンサーやメーカー等のもの。

FIM MiniGP JAPAN Series（https://www.minigp.jp/）
2023 年 6 月 25 日（筑波サーキット）
若きライダーにスキルアップとチャンスを与えるため、10 歳～14 歳を対象に世界各地で開催されているレース「MiniGP」。JAPAN Series は 5 大会 10 戦開催され、ランキング上位者は世界大会に進出できる。
渡辺選手はアドバイザーのひとりとして参加。

FIM MiniGP JAPAN Series（https://www.minigp.jp/）
若きライダーにアドバイスする渡辺選手。
MiniGP のアドバイザーには実績あるベテランライダーが複数参加しており、次代を担うライダーを育てようとする取り組みの本気度が伝わってくる。近い将来、全日本や世界で活躍する姿が見られるに違いない。

「選挙割」賞品　写真パネル（１）
2023 年 9 月（かぬま選挙割実行委員会）
選挙割とは、投票率アップと地域商業の活性化を図るキャンペーン。投票後にもらえる投票済証を協賛店で提示すると、割引等の特典が得られる仕組みだ。

「選挙割」賞品　写真パネル（２）
2023 年 9 月（かぬま選挙割実行委員会）
このときの「選挙割」では、応募者の中から抽選で「かぬまふるさと大使」のサイン入りアイテムが当たる新企画が実施された。

「選挙割」賞品　写真パネル（３）
2023 年 9 月（かぬま選挙割実行委員会）
渡辺選手はこのキャンペーンに協力。３種の写真パネルにサインを入れて提供した。

「小室旭のバイクに乗ろうバイクで遊ぼう」（走行会）
2023 年 10 月 22 日（筑波サーキット）
サーキットで走るには、通常、ライセンスを取得したり装備を整えたりしなければならないが、多くの人が気軽に体験できるよう条件を整えたものが走行会だ。
写真は主催者の小室旭選手。渡辺選手とチームメイトだったこともあるベテランライダー。

「小室旭のバイクに乗ろうバイクで遊ぼう」（走行会）
2023 年 10 月 22 日（筑波サーキット）
渡辺選手は様々な走行会やスクールに指導者側で参加し、アドバイスを行っている。
この日は全日本最終戦の翌週。「チャンピオン獲ってまだ一週間で機嫌がいいので、何でも聞いてください。何でも教えます！」とのトークには参加者から拍手と歓声が巻き起こった。

全日本ロードレース選手権３連覇報告
2023 年 12 月 11 日（県庁・特別会議室）
JC 鹿沼青年会議所、日本 JC ライダーズクラブのメンバーと共に福田富一知事を訪問し、3 連覇を報告。
知事からは「とちぎ未来大使」委嘱を打診された。

鹿沼市長に３連覇を報告
2023 年 12 月 26 日（鹿沼市庁舎）
JC 鹿沼青年会議所、日本 JC ライダーズクラブ、鹿沼リータリークラブのメンバーと共に地元･鹿沼市役所を訪問し、市長に３連覇を報告。
鹿沼市はこの日、３連覇を讃える横断幕をお披露目。現在、市役所第２駐車場に掲示されている。

MFJ MOTO AWARDS 2023
2023 年 12 月 16 日（ポートシティ竹芝）
国内モーターサイクルスポーツの成績上位者を称える表彰式で、全日本ロードレース・モトクロス・トライアル・スノーモビル・エンデューロ・スーパーモトの各クラス上位３位までが参加。
写真はロードレース ST1000 クラス、（左）２位の荒川晃大選手、（右）３位の國峰啄磨選手。激戦を繰り広げたライバルだ。

MFJ MOTO AWARDS 2023
2023 年 12 月 16 日（ポートシティ竹芝）
2023 年のチャンピオンは 22 人。その中に栃木県出身者が 3 人入る大活躍の年となった。
（右）ロードレース JP250INT　千田俊輝選手
（中）スーパーモト S2　大金歩夢選手
2 人は鹿沼市下永野のオフロード施設「鹿沼木霊の森」にもたびたびトレーニングに訪れている。

所属チームの紹介

【　Astemo Honda Dream SI Racing　】

2020 年に「Keihin Honda Dream SI Racing」として発足。2021 年からはメインスポンサーの組織変更とともに現在のチーム名となった。

監督は、国内外で活躍、数多くのチャンピオンを獲得しレジェンドライダーと呼ばれる伊藤真一氏。チーム名の SI はその頭文字で、略称は「SIR」。

2023 シーズンは全日本に 4 選手がフル参戦したほか、鈴鹿８時間耐久ロードレース、アジアロードレース選手権で活動している。

作本輝介選手（JSB1000 クラス）

2020 年 ST1000 クラス 3 位、2021 年 2 位、2022 年 JSB1000 クラス 4 位、2023 年 8 位と最前線で活躍。

2021 年には渡辺一馬選手と同チームによるチャンピオン争いを繰り広げている。

水野涼選手（JSB1000 クラス）

2020 年まで全日本で活躍した後、2021 年・2022 年は英国スーパーバイク選手権に参戦。2023 年は YAMAHA の牙城と言われる全日本 JSB1000 クラスで２勝を挙げ、ランキング３位となった。

ブラパ・ワンムーン選手（Burapa Wanmoon）
タイ出身、14 歳の若きライダー。2023 年に ST600 クラスで全日本デビュー。チーム、マシン、コースと初めて尽くしの戦いだったが、ランキング 19 位を得た。

2023 シーズン開幕へ

まだ冬のさなかの 2 月 18 日。渡辺選手は「モビリティリゾートもてぎ」（旧名称：ツインリンクもてぎ）の北ショートコースで、サーキットでの走行練習を開始した。

オフロード（未舗装路面）向けのマシンに舗装路面向けのタイヤを付けた、モタードと呼ばれるバイクで周回を重ねる。同様のトレーニングを行う選手も多い。

2021 年・2022 年と ST1000 クラスを連覇してきた渡辺選手。王者として３連覇に挑む 2023 年の開幕戦は、地元栃木のここ「モビリティリゾートもてぎ」のロードコースで 4 月頭に行われる。残り 1 か月半。

3 月 16 日、チームとしてサーキット現地での走行始め。実際にレースで使うマシンでの走行は、様々な制約から頻繁に行うことはできないが、ライダー・チームが経験を重ねマシンの調整を進めることは非常に重要だ。

マシンは引き続き「Honda CBR1000RR-R FireBlade」、排気量 999cc のモンスターだ。車両自体は一般に市販されており、渡辺選手の参戦する ST1000 クラスでは改造できる範囲が極めて狭く、市販状態に近い。また、タイヤもダンロップに統一されている。ライダーの技量がよりものを言うクラスだ。

王者の証、ゼッケン「１」を着けての走行。ライダーとしてこれまで通り全力を尽くすのみだ。
だが、チームとしては前年からメカニック等のメンバーが大きく変わっており、まずはそのすり合わせも重要な課題だった。

走行前後にミーティングを重ね、マシンのセッティングを詰める。ライダーにとって、マシンのフィーリングや要望を的確に言語化し伝えることも重要な能力のひとつだ。そしてチームとして信頼関係の構築も重要である。開幕戦まで残り２週間。

ラウンド１

「スーパーバイクレース in もてぎ」

モビリティリゾートもてぎ（栃木県）

３月２４日。開幕戦を一週間後に控え、シーズン初の公式行事として「公開テスト」が行われていた。
ST1000 クラスではシーズンを通して戦う「年間エントリー」のライダーが 25 名。そこにラウンドごとにスポット参戦するライダーが加わり、10 月までに全６レースが行われる。

シーズンを争うライバルは、2022 年、最後の最後まで激戦を繰り広げランキング２位となった國峰啄磨選手をはじめ、海外から戻ってきたベテラン、継続して ST1000 で戦うライダー、他クラスから ST1000 に変更したライダー、全日本初参戦のライダーなど多彩な顔触れだ。

公開テストの後はすぐにレースウィークに突入となる。各ライダーとも精力的に走行を重ね、マシンの調整を進めていった。

３月３０日、木曜日。走行前のミーティング。
いよいよ開幕戦「スーパーバイクレース in もてぎ」のレースウィークとなった。水曜日は資器材の搬入とピッ

トの設営、木曜日・金曜日が練習走行、土曜日に予選、日曜日に決勝レースというスケジュールだ。

走行開始を待つスタッフ。左端は今年からチームに加入したチーフエンジニアの佐々木哲也氏。
タイヤを覆っているのはウォーマーで、レース用のタイヤは暖まっている状態で最大のグリップ力を発揮するため、事前に十分に暖めておく。

走行前、入念に装備をチェックする渡辺選手。

誰であろうと常に接触や転倒の可能性はあり、身体のダメージを軽減するためのスーツ・ヘルメット・グローブ・ブーツやパット等の装備は非常に重要なものだ。エアバッグを内蔵しているものもある。

走行の準備が整い、集中を高める渡辺選手。
スタッフは各自のポジションで静かに合図を待つ。
やがて渡辺選手が頷くとスタッフが一斉に動きだし、タイヤウォーマーが外され、マシンがピットから外に引き出される。走行開始だ。

開幕戦の舞台「モビリティリゾートもてぎ」のロードコースは、世界最高峰のバイクレース「MotoGP」の日本ラウンドが開催されるコースでもある。
ST1000 クラスのトップライダーの場合、全長 4,801mのこのコースを１分５０秒程で周回する。

排気量 999cc の水冷 4 サイクル DOHC4 気筒エンジンが咆哮する。コーナリングのためスピードを落とした後、直線の立ち上がりでは速やかに最高速に戻すため猛加速。あまりのパワーに前輪が浮き上がることもある。

４月１日、土曜日。
土日には多くの観客が訪れ、様々なイベントも開催される。中でも昼に行われる「ピットウォーク」は、ライダーからサインをもらったり、マシンを間近で見たりできる、大人気のイベントだ。

土曜日午後には ST1000 クラスの予選が行われた。制限時間中は何周でもでき、その中で各ライダーの１周のタイムが最も短いもの同士を比べ、速い順に決勝開始時の並び順（グリッド）が決まる。
渡辺選手は 1 分 49 秒 560 で５番手となった。トップの國井勇輝選手との差は僅か 0.599 秒だ。

４月２日、日曜日、開幕戦の決勝日。
朝のうちはぼんやりした天気で、時折雨がパラつき関係者を悩ませた。タイヤには乾いた路面用、濡れた路面用などいくつか種類があり、中途半端な路面状況の場合、その選択がレースの大勢を決することもある。昨年の開幕戦はまさにその典型だった。

「涼、路面どうだった？」
ST1000 クラスの前に決勝レースが行われた、JSB1000 クラスの水野涼選手に状況を確認する。実際に走ってきたチームメイトは重要な情報源だ。
どうやら乾いた路面での真っ向勝負となりそうだった。

今回、ST1000 クラスの決勝レースは全日程の最後に行われる。
しばし、一人集中を高める。

完全に乾いた路面で迎えた決勝。
各ライダーはピットから出てコースを一周し、路面状況等を自分の目で確認。前日の予選で順番が決定されたグリッドに向かう。

５番グリッドに到着し、スタートを待つ。
スタッフが直接ライダー・マシンに関われるのはここまでだ。入念に最後のチェックを行う。
そして遂に、開幕戦の決勝レースがスタートした。

決勝レースは全車一斉にスタートし、規定周回数をクリアした順で順位が決まる。今回は 15 周での戦いだ。
渡辺選手はスタートで若干遅れ、序盤はトップグループの後ろに位置し、５周目までは７位で周回を続ける。

前の６台を追う展開がしばらく続いたが、中盤に入った６周目から、１台また１台とライバルをかわしてじりじりとポジションを上げ、９周目には４位に浮上した。
写真の３人は#36 高橋巧選手、#27 荒川晃大選手、#32 榎戸育寛選手。彼らとはシーズン最後まで激戦を繰り広げることとなった。

レースも終盤に突入。先頭は５周目からトップを走り続ける國峰啄磨選手、次いで予選１位の國井勇輝選手。目の前の３番手は 2020 年のチャンピオン高橋裕紀選手だ。
渡辺選手は９周目から高橋選手を追う展開となり、そのまま最後の一周（ファイナルラップ）を迎える。

そのファイナルラップ、コース中盤のＳ字コーナーで遂に高橋選手をかわして３位に浮上。高橋選手を連れたまま、Ｖ字コーナー、ヘアピンカーブ、ダウンヒルストレート、９０°コーナー、ビクトリーコーナー（最終コーナー）を攻略していく。

渡辺選手はそのまま３位でチェッカーフラッグを受け、開幕戦の表彰台を獲得した。拳を突き出して出迎えるスタッフ。
高橋選手とのタイム差は僅か 0.098 秒だが、３位と４位では得られるランキングポイントに大きな違いがある。

表彰台での「スパークリングファイト」と呼ばれるセレモニー。地元の開幕戦で表彰台を獲得し笑顔の渡辺選手。その視線の先には渡辺選手の最強の応援団と言える、二人の息子の姿があった。

ラウンド３

「スーパーバイクレース inＳＵＧＯ」

スポーツランドＳＵＧＯ（宮城県）

５月１０日、水曜日。
戦いの舞台は宮城県の「スポーツランドＳＵＧＯ」へ。この日は公開テスト３日間の中日だ。
各サーキットとも集客のためさまざまな工夫を凝らしているが、ここスポーツランドＳＵＧＯではこの年、モータースポーツをモチーフにしたカフェをオープン。新たな名所にもなっている。

スポーツランドＳＵＧＯは山の中にある。インターナショナルレーシングコースは全長 3,621m、国内サーキット中で最大の標高差（69.83m）が特徴的だ。コースの大部分はゆるやかな下りだが、最終コーナーからホームストレートにかけて10%勾配の大坂を一気に駆け上がる。

例年、スポーツランド SUGO でのラウンドは 5 月～6 月に行われている。時期的・立地的に、雨や霧、急激な天候変化に悩まされる日も少なくないが、この日は快晴で天候も安定。各ライダーとも精力的に周回し調整を進めていた。

この日は各クラス２本ずつの走行枠があり、渡辺選手のタイムは２番手、４番手。
２本ともにトップタイムをマークしたのは、今年ST1000クラスにスイッチした#32 榎戸育寛選手。開幕戦では６位だったが、ここＳＵＧＯでその存在感を一気に増しつつあった。

５月１９日、金曜日。
いよいよラウンド３、「スーパーバイクレース in SUGO」のレースウィークとなった。ラウンド２では ST1000 のレースが行われなかったため、今回が２レース目となる。
朝、チームを出迎えたのは鉛色の空と濡れた路面。
路面が乾いていれば「ドライ」、濡れていれば「ウェット」。程度により「ハーフウェット」「ヘビーウェット」とも表現する。

バイクはエンジンでガソリンを燃焼（爆発）させ、その力をタイヤの回転に変えて進むが、その機構とともに重要なのがそれらを制御するコンピューター（電子制御デバイス）だ。
レースシーンでは、パソコンでマシンの状況を確認したり、制御の内容を調整したりすることが当たり前に行われている。

スタッフとライダーの間では無線を使用できない。走行中のライダーに情報や指示を伝えるには、こうしたサインボードを使用する。掲示する内容は、周回数・順位・タイム・タイム差・作戦など状況によりさまざま。

この日は雨雲が通ったり、その合間に路面が乾いたりと、一日を通して不安定な天候が続いた。中途半端に濡れた路面では転倒のリスクが高まるため、各チームとも慎重に調整を進めていく。

走行の合間、伊藤真一監督と。
伊藤監督は渡辺選手が師と仰ぐ人物だ。数々の伝説的な活躍から「レジェンド」、40 代・50 代になっても現役で活躍したことから「鉄人」、などの異名がある。
宮城県出身であり、ここスポーツランドＳＵＧＯはまさに地元だ。

ピットで頭上のモニターを見る伊藤監督。
車両整備用に各チームに割り当てられた作業場（部屋）をピットと言う。実績と参戦ライダー数により割り当て数が変わってくる。
レースウィークには、チームによりパーテーションや机、モニター等が設置される。

予選１位はここでも快走を見せた#32 榎戸選手。予選１位には、決勝スタート時に最も前のグリッド（ポールポジション）が与えられる。
渡辺選手は１分２９秒５２３で２位。以下、８位までが２９秒台にひしめく。開幕戦優勝の#2 國峰選手は７位だが、決勝ではこのまま黙ってはいないだろう。

５月２０日、土曜日。
前日に引き続き雲は晴れず、ウェット路面での予選となった。
ヘルメットのシールド（前面のカバー）は交換でき、各ライダーが状況に合わせて選択する。曇り・雨天など暗い状況では、こうした透明度の高いものがよく使われる。

走行直後、汗だくでモニターのリザルトを確認する渡辺選手。
自身やライバル達のタイムは想定の範囲内だっただろうか。それとも。

予選走行後のミーティング。

感想、数値、要望、提案のキャッチボールを繰り返し、チーム全体で勝つためのマシンと作戦を練り上げていく。

ST1000 予選終了後のピットウォーク。
右端はアジアロード選手権に参戦しているパサウィット・ティティワララック（Passawit Thitivararak）選手。アジアの日本ラウンドがここ SUGO で開催されるため、そのテストも兼ねて ST1000 にスポット参戦した。同郷選手と一緒でブラパ選手も嬉しそう。

５月２１日、日曜日、決勝。
ここにきて天候に恵まれ、グランドスタンドは大勢の観客で賑わった。バイク弁当（燃料タンク型の弁当箱に入っている）の人気チームカラー版が販売されるなど、ここ SUGO でもさまざまなイベントが開催され観客を楽しませてくれる。

ピットに佇む渡辺選手。
決勝を控え、何を思う。

１１：４５、決勝直前。
しばし、ひとり集中。

息を殺し、渡辺選手が動き出すのを待つスタッフ。
周囲はライバル達のエンジン音で満たされているが、ピット内はある種の静寂に包まれていた。
今このとき、全てはライダーのためにある。

やがて、渡辺選手の合図とともに時が動き出した。
暗いピットから光に包まれた決勝の舞台に歩を進める。
メディアカメラマンが一斉にシャッターを切り、中継のカメラがその足取りを追う。

２番グリッド上、佐々木チーフエンジニアが声をかける。
それはまだ２回目の光景だったが、すでにもう何年も一緒に戦ってきているかのような雰囲気にも見える。

周辺には一般観客の姿も。サーキットによっては、この決勝スタート直前の場を間近で見学できる「グリッドウォーク」というイベントも開催され、人気を博している。

やがてコース上には選手のみが残され、そして遂に決勝の火蓋が切られた。

スタートでも#32 榎戸選手がリード。そこに#33 國井選手、渡辺選手が続くオープニングとなった。
最初のコーナーをトップで通過することを「ホールショット」と言う。ポールポジションもホールショットも獲得ポイントへの影響はないが、ライダーの速さの証のひとつであり、名誉なことである。

２周目の途中まではこの隊列が形成されていたが、中盤に差し掛かった馬の背コーナーで渡辺選手が#33 國井選手をかわし、２番手に浮上した。

その後ろ、４番手にオレンジのマシンが上がってきていた。７番グリッド発進の#2 國峰選手だ。４周目には#33 國井選手を、５周目には渡辺選手もかわし、遂に２番手に。そのまま１２周目まで激しい接近戦が続いたが、１３周目、渡辺選手が#2 國峰選手を抜き返して２番手に戻ってくる。

その順番のままファイナルラップの１８周目に突入。最終コーナー直前のシケイン（鋭いＳ字コーナー）で#2 國峰選手が渡辺選手を抜くも、直後、最終コーナーからの立ち上がりで渡辺選手がさらに抜き返す。大坂を登り切り、そのままフィニッシュラインを通過。２位と３位を分けたそのタイム差は僅か 0.092 秒だった。

佐々木チーフエンジニアが死闘から戻った渡辺選手を出迎える。

優勝は公開テストから好調ぶりを見せ、２位に２秒以上の差をつけポールトゥウィン（予選１位＝ポールポジションの選手が勝利＝ウィンすること）を達成した#32 榎戸選手だ。

スパークリングファイトを終え、ボトルを合わせて互いの健闘を称え合う３人。青空の下、熱くも清々しい戦いだった。

次戦は 3 か月後、舞台は大分県の「オートポリス」。ここでの ST1000 は土・日に１レースずつ行われるため、ランキングを争う上で重要な大会となる。

ラウンド７

「スーパーバイクレース in 岡山」

岡山国際サーキット（岡山県）

９月２１日、木曜日。
ラウンド７「スーパーバイクレース　in　ＯＫＡＹＡＭＡ」の舞台である岡山国際サーキットでは、各チームの設営が行われていた。
８月、大分県・オートポリスでのラウンド６「スーパーバイクレース　in　オートポリス」では、ST1000 の決勝レースが土・日１回ずつ行われた。

９月２２日、金曜日。練習走行に備える。
オートポリスでは予選を快走、ポールポジションを獲得した渡辺選手。土曜日の決勝レース１ではマシンに問題が出て表彰台は逃したものの、４位と上位を維持。そして日曜日の決勝レース２では、中盤からトップを独走し後続を引き離すも、終盤で転倒を喫してしまう。２５位に沈み、痛恨のノーポイントとなった。

ST1000 は６レースでの獲得ポイントの合計でランキングを争う。この時点、４レース終了時のトップは#2 國峰選手の 77p。渡辺選手は 49p で４番手、残り２レースとも優勝したとしてもライバル達が上位をキープしていると追いつけない。非常に厳しい状況となっていた。

岡山国際サーキットは全長 3,703m。コースと観客の距離が比較的近いため、レース・マシンの迫力を満喫できる。また、独特のアングルで撮影できるポイントが多く、カメラマンにも喜ばれている。

オートポリスの決勝レース１で２位、レース２で ST1000 初優勝を決めた#27 荒川晃大選手。2022 年に ST600 のチ

ャンピオンとなり、今シーズンから ST1000 にステップアップ。シーズン序盤から上位で戦っていたが、８月の「鈴鹿８時間耐久ロードレース」（鈴鹿８耐）参戦を経てその速さにさらに磨きがかかってきていた。

ピットのパーテーションの裏側にはいくつものパソコンが並び、走行データの分析等が行われている。ここでも多くのスタッフが活動している。
チームのひとりひとりが全力でライダーを後押ししている。0.01 秒でも早く、１位でも上に、そして勝たせるために。

走行後、マシンの外装をチェック・清掃し、ピカピカに磨き上げるスタッフ。
チームがサーキットで活動するには、資器材や食事の手配、洗濯などなど、マシンの整備以外にも膨大で多岐にわたる作業が必要だ。

９月２３日、土曜日。予選。
ポイントで上位３人と大きな差があるうえ、強力なライダーのスポット参戦も重なった。王者のゼッケン「１」を背負う渡辺選手へのプレッシャーは想像を絶するものだろう。

しかし、いかなる状況であろうと、勝利に向け全力を尽くす。この点はいささかも変わることはない。
そして予選が始まった。

コースレコードを更新しポールポジションを獲得したのは#27 荒川選手。負傷により欠場の#33 國井選手の代役として参戦した長島選手が２位。そして渡辺選手は僅か 0.002 秒差で予選３位となった。
その後に続くのは#2 國峰選手、#32 榎戸選手。やはり速いライダーが順当に上位に着ける結果となった。

予選終了後のミーティング。
決勝は日曜午前。最終戦のチェッカーフラッグを受けるまで、チームは全力を尽くし続ける。

９月２４日、日曜日。快晴。
１１時２５分、マシンがピットから引き出された。

決勝が始まる。

３番グリッドで観客の声援に応える渡辺選手。
予選３位までは決勝スタート時に最前列（フロントロウ）に配置され、４位以下よりも有利となる。

伊藤監督は渡辺選手に何を伝えたのだろうか。
前方を見据えたまま聞く渡辺選手。

スタートが迫り、スタッフが退去する時刻となった。
次々に拳を合わせピットに戻っていく。これは、レースにおいて激励や祝福、健闘を讃える際に使われる仕草だ。
やがてコース上にはライダーだけが残された。

そしてシグナルが変わり、１８周の決勝が始まった。スタートを決めオープニングでトップに立ったのは#33 長島選手。そこに#27 荒川選手、渡辺選手が続く。

１周目中盤で#2 國峰選手が渡辺選手をかわし３番手に。４周目には#32 榎戸選手も浮上、渡辺選手は５番手となった。

やがて#27 荒川選手が#33 長島選手をかわしトップに立ち、そのまま２台は至近距離で周回を重ねていった。が、１２周目、コーナリングで#27 荒川選手が転倒。至近距離にいた#33 長島選手も、接触はなかったもののつられるように転倒してしまい、トップ２がレースから離脱する事態となった。

14 周目、#32 榎戸選手が#2 國峰選手をかわしトップに立つと、その順番のままファイナルラップに突入。渡辺選手はその少し後ろ、３番手で追う状況だ。

渡辺選手はこのまま３位でフィニッシュ、かと思われたが…
残り半周のところで#2 國峰選手がイン側から仕掛けるも、#32 榎戸選手と接触、両者転倒してしまう。
「「「おおお！？」」」
モニターで中継を追っていたスタッフがどよめく。

ピットを飛び出し、渡辺選手を出迎えるスタッフの皆さん。
渡辺選手はそのままトップでチェッカーフラッグを受ける。

サバイバルとなったレースを生き抜き、今期初優勝を遂げた渡辺選手。
念願の１勝に、伊藤監督の嬉しさもひとしおだろう。

ウイニングランを終えホームストレートに戻ってきた渡辺選手。この後のインタビューでは「嬉しいが、素直に喜べない」と答えている。
まるでオートポリスで逃がしたものが戻ってきたような、思いがけない展開だった。

前戦の転倒ノーポイントにより三連覇が遠のいていた渡辺選手。しかしこの岡山で#27 荒川選手と#32 榎戸選手が転倒。#2 國峰選手は復帰し１０番手で戻ってきたものの、走行妨害により失格の裁定が下された。
ランキング上位４人が１回ずつノーポイントとなったことで、チャンピオン争いは仕切り直しの状態となる。

これが欲しかった！
途切れかけていた三連覇への道が再び強く照らされた。

ライダーが優勝すると、その監督も一緒に表彰台に上がることができる。
優勝のトロフィーを掲げ、その重さを噛み締める渡辺選手。

#36 高橋巧選手が２位、#3 高橋裕紀選手が３位に入り、ともに念願の今季初表彰台を獲得。これにより、ポイント差は大きいものの、この二人も逆転チャンピオンの可能性を残して最終戦の鈴鹿に進めることになった。

ベテランライダー３人によるスパークリングファイト。
晴れの国・岡山の青空に、白いアーチが描かれた。

長い記者会見から解放された渡辺選手を歓喜のスタッフが出迎える。ひとりひとりと抱擁をかわしながらピットに戻る。
その足取りは、今シーズンいち軽やかだった。

#2　國峰啄磨選手　77p
#32 榎戸育寛選手　76p
#1　渡辺一馬選手　74p
#27 荒川晃大選手　64p
#36 高橋巧選手　　64p
#3　高橋裕紀選手　61p
最終戦を前に、チャンピオンの可能性を残すライダーは６人に絞られた。
最終決戦は１０月１６日、鈴鹿サーキットだ。

「渡辺一馬選手展-王者の肖像-」は、鹿沼市が取材したラウンド１・３・７の内容に基づいて作成しました。

■全日本ロードレース選手権のレースの最新情報、リザルト、インタビュー動画等は公式ホームページ「JRR 全日本ロードレース　オフィシャルファンサイト」をご覧ください。

■日本ロードレース選手権のレース動画は「moto Channel」で視聴できます。
http://moto-ch.jp/

■取材協力

・チーム　Astemo Honda Dream SI Racing　様

・一般社団法人 日本モーターサイクルスポーツ協会様

・ホンダモビリティランド株式会社様
（モビリティリゾートもてぎ）

・株式会社 菅生様
（スポーツランドＳＵＧＯ）

・株式会社 岡山国際サーキット様
（岡山国際サーキット）

・株式会社 Ｐ－ＵＰ　Ｗｏｒｌｄ様
（FIM MiniGP JAPAN SERIES 主催）

・小室旭選手
（小室旭のバイクに乗ろうバイクで遊ぼう　主催）

■発行日
２０２４年1月１６日

■発行　　鹿沼市
〒３２２－８６０１
栃木県鹿沼市今宮町１６８８－１
（代表電話）０２８９－６４－２１１１